

社会連携プロジェクト

高山村で「エネルギーの地産地消」を進めていくための村民ワークショップを開催

高山村（長野県）で「エネルギーの地産地消」を進めていくための第1回村民ワークショップを、高山村保険健康福祉総合センターで開催しました。

高山村は、昨年8月、日本版「首長誓約」に長野県内で初めて誓約し、今年は「エネルギーの地産地消」を村の中でどのように進めていくか、具体的なアクションプランを策定していきます。このため、村民の方から意見や質問をいただく場として村民ワークショップを開催しました。

高山村の内山信行村長の挨拶の後、ワークショップのための情報提供として、まず、杉山範子特任准教授が地球温暖化問題、再生可能エネルギー、日本版「首長誓約」などについて説明しました。続いて、村の担当者から高山村環境基本計画案をご紹介いただき、最後に、高野雅夫教授が日本国内のコミュニティパワー（地域に根差した再生可能エネルギーによるエネルギー事業）の事例を紹介しました。

その後、中学生から老人クラブ連合会まで参加者33名が世代を超えた6つのグループで、高山村での「再生可能エネルギーの利用」、「エネルギーの地産地消」をテーマに、意見や質問を出し合いました。最後にグループごとに内容を発表して、参加者全員で共有しました。始めは、「何を言ったらいいかわからん」との声も聞かれましたが、次第に「再生可能エネルギーについて、知らないことがたくさんあることが分かった」、「高山村でできることはいろいろあると思う」などのたくさん意見と質問が出されました。

第2回村民ワークショップは9月2日（土）開催の予定です。



村民ワークショップの様子

コンサルティングファームの活動については、下記のウェブサイトもご覧ください。

<http://ercscd.env.nagoya-u.ac.jp/consulting-firm/jpn/project/2016.html>



教育活動

臨床環境学研修(ORT)・現地見学会を白川町・東白川村で実施

当センターでは、通常は大半を各専門の研究室で過ごす大学院博士後期課程を対象に、研究室だけでは得られない「俯瞰力」と「現場力」を併せ持った人材となることを意図した「統合環境学特別コース」を開講しています。その一環として、学外フィールドで異分野・異国籍の学生グループが調査を行い、地域の持続可能性に関わる問題を自主的に見つけ、現状把握（＝診断）と解決方法の提案（＝処方）を行う「臨床環境学研修(ORT: Onsite Research Training)」を実施しています。今年度の対象フィールドは岐阜県白川町・東白川村です。その皮切りとして、臨床環境学研修を受講する留学生3名・日本人学生3名、担当教員に加え、博士前期課程向け科目「持続可能な地域づくり実践セミナー」の履修生も参加しての現地見学会が、6月1日（木）～3日（土）の3日間にわたって実施されました。

白川町・東白川村は岐阜県中部の中山間地域に位置し、木曾川水系飛騨川流域に属



実験的林業を行っている東白川村の母樹林公園



白川町佐見地区の説明を受ける学生と教員

します。県内でも人口減少が特に著しく、主力産業であった林業や茶生産も振るわない状況です。3日間の実習では域内をくまなく回り、役場や主な施設、事業所などを訪問し、職員や住民の皆さんから、移住・定住や産業振興といった取組について聞き取りや意見交換を行うとともに、自然環境を観察しました。受講生からは、「今までほとんど見たことのない日本の中山間地域を見ることができて有意義だった」「地域の厳しい状況を知る一方で、美しい自然や、地域住民の様々な取組を見ることができ、力になれるような研究ができればと思った」といった感想を聞くことができました。

現在、各グループが個別の研究テーマを決め、現地調査に入っております。その成果は、12月に現地で開催される最終成果報告会（どなたでも参加いただけます）にて報告される予定です。

興味を持たれた方は、下記のウェブサイトもご覧ください。

<http://ercscd.env.nagoya-u.ac.jp/jpn/course/overview.html>



【告知】「トークバトル 鉄道の存在意義、そして存続方策」緊急開催決定!

「全国で頻発する鉄道廃線問題・・・。その最前線、修羅場で体を張ってきた二人が、いま、ホンネでアツク語る」

第三セクター鉄道の公募社長として3年弱にわたり利用促進のため奮闘し、鉄道存続と地域活性化に大きなインパクトを与えた『鉄道を守った男』山田和昭さんと、鉄道廃線確定後の代替交通確保に多数携わり、現在も JR 北海道の廃線問題にあたっている『鉄道を看取った男』加藤博和教授の2人が、「修羅場」の内幕をアツク語ります。そして、鉄道の意義と存続方策、そして持続可能な地域を支える公共交通網を守っていくために必要と考えることについて本音で議論します。

・日 時：2017年9月17日(日) 14:00～17:00
(終了後、交流会<実費>を予定)

・場 所：名古屋大学東山キャンパス ES 総合館 1階 ES ホール
(名古屋市営地下鉄名城線名古屋大学駅、市営バス名古屋大学バス停から徒歩5分。経路・会場はバリアフリーに対応しております。会の趣旨を踏まえ、自家用車でのご来場はお控えください。)

・参加費：無料(どなたでもご参加いただけます)

・申 込：下記ウェブサイトをご参照ください。

<http://orient.genv.nagoya-u.ac.jp/railway.html>



「鉄道を守った男」

津エアポートライン(株)シニアエキスパート
若狭鉄道(株)前・代表取締役社長
山田和昭



「鉄道を看取った男」

名古屋大学大学院環境学研究科教授
(株)井笠バスカンパニー相談役
加藤博和

全国で頻発する鉄道廃線問題・・・
その最前線で体を張ってきた二人が、いま、ホンネでアツク語る

緊急企画「トークバトル 鉄道の存在意義、そして存続方策」

日時：2017年9月17日(日)14:00-17:00 (終了後、交流会を予定)
場所：名古屋大学東山キャンパス ES総合館1階 ESホール
申込・問合せURL：<http://orient.genv.nagoya-u.ac.jp/railway.html>
※どなたでもご参加いただけます
主催：名古屋大学大学院環境学研究科附属持続的共発展教育研究センター
後援：(公財)地域公共交通総合研究所、くらしの足をもんて考える全国フォーラム実行委員会

共発展センター研究紹介

小松尚准教授(共発展センター兼任教員・臨床環境学コンサルティングファーム部門)

私(小松)の専門は建築計画学。修士課程までは建築設計の実務者になるべく勉学に打ち込んでいましたが、修士課程修了後は名古屋大学のキャンパス再整備に教員として9年間参画し、また並行して博士学位論文を書きました。その過程で、建築が当事者との対話やその周りの街なくしては成り立たないという当たり前のことに実践の中で実感を持って気づき、学位取得後は立地する街や地域とともに建築、特に公共建築のありかたに関する教育研究、そして実践を続けてきました。研究室学生にも事ある毎に「現場での実感」と「当事者との共感」を大事にしようと話しており、それが研究室のモットーになっています。



最近では地域拠点としての小中学校校舎の建替計画・設計を関係者と膝詰めで議論し、実現するという実践と研究を兼ねたプロジェクトの他、国内外の滞在型図書館に関する研究、空き家・空き地の処遇、郊外住宅地や中山間地域の持続可能性などについて教育研究を実践的に行っています。その際、上記のモットーに基づいて、どんどん先に進んでいく現場と教育研究をどう結びつけるかを常に意識するとともに、建築学という分野に閉じこもらず、関連分野との接点づくりや協働作業を積極的に考えています。まとまった成果が得られるまでには時間がかかりますが、逆にそれが私たちの教育研究や実践の意義やとるべき方法を明確に、そしてシャープにしてくれます。このようなスタンスに共感してもらえる方々とさまざまカタチの協働を今後も追求していくつもりです。

「名古屋大学小松研究室・ホームページ」のウェブサイトもご覧ください。

<http://comweb.campus.provost.nagoya-u.ac.jp/komatsu/html/1welcome.htm>



編集 後記

名大共発展センター・ニュースレター第11号をお届けします。今号は、共発展センターが継続してきた活動の状況やイベント情報などを報告しています。この時期は、ワークショップやORTなど地域との意見交換を通じて、地域の理解を深め一歩一歩これからの方策について模索していく時期となっています。皆さんも、地域で開かれる様々なワークショップやイベントに参加してみたいかがでしょうか。

今後も、共に発展すべく、ORT(臨床環境学研修)やコンサルティングファームの活動を行い、その成果をニュースレターでみなさまにお伝えしていきます。引き続き共発展センターをご支援頂きますようお願いいたします。

名古屋大学



大学院環境学研究科附属
持続的共発展教育研究センター

共発展センター・ニュースレター 編集部

名古屋大学大学院環境学研究科附属持続的共発展教育研究センター 事務局

〒464-8601 名古屋市千種区不老町 名古屋大学環境総合館421号室

電話/FAX：052-747-6547

E-mail：cesfirm@ercscd.env.nagoya-u.ac.jp